

論文内容の要旨

論文提出者氏名 牛嶋 壮

論文題目

Visual Analog Scale Questionnaire to Assess Quality of Life Specific to Each Symptom of the International Prostate Symptom Score

論文内容の要旨

下部尿路症状の重症度評価として、1992年にアメリカ泌尿器科学会によって提唱された国際前立腺症状スコア（IPSS）が現在も広く用いられている。IPSSとは7項目の下部尿路症状について、それらの頻度すなわち0点の「まったくない」から5点の「常に」までの6段階で点数化されている。IPSSの合計点数は患者の生活の質（QOL）と関係しているものの、各項目の重症度は各患者の悩みとは関連しておらず、IPSSによるQOLの評価には限界があった。そこで著者らは、疾患の影響や治療効果の判定に広く用いられているVisual Analog Scale（VAS）でIPSSの各症状に特異的なQOLを評価する質問票を作成し、本研究においてその再現性と治療評価における妥当性を検討することを目的とした。

VAS質問票は、左端の「とても満足」から右端の「とてもいやだ」まで10cmの直線を引いた回答欄をIPSSの質問7項目各々に併記し、その直線上に患者の困窮度を×印で回答する形式とした。2003年4月から2004年8月に下部尿路症状を主訴として京都府立医科大学泌尿器科外来を受診した、46歳から84歳（中央値67歳）の計246名の男性患者を対象にIPSSとVAS質問票による調査を行った。治療効果判定における質問票の有用性を評価するため、 α 1-blockerによる内服治療を行った46名には治療前に加えて治療後4週から6週目に再度調査を行った。また、質問票の信頼性および再現性の検討のため、健常男性55名と下部尿路症状を有する男性44名に、治療を行うことなく1ヶ月の間隔をおいて、質問票による再調査を行った。

VAS質問票の評価としては、7つの質問各々におけるIPSSとVASの相関、排尿状態全体のQOLをスコア化したIPSS-QOLに対するVASとIPSSの相関の比較、IPSS7項目およびVAS7項目で最大スコアの症状と患者の主訴の関係について分析した。また多変量解析を用いて、IPSSの7項目とVASの7項目を合わせた14項目のIPSS-QOLに対する予測因子としての評価を行

った。さらには、 α 1-blockerによる内服治療でのVASスコアの変化とIPSS-QOLの変化についても相関関係を分析した。

246名の患者と55名の健常男性のVASスコアの比較では全項目で有意に患者群のスコアが高かった。44名の再現性の検討では健常男性、下部尿路症状をもつ患者群ともにIPSS、VASの両方で2度の回答間に高い相関を認めた。246名の患者評価では、IPSSとVASの同じ項目の回答間には有意な相関関係を認めたが、IPSSにおける最高スコアの項目と主訴の一致率は58%であったのに対し、VASにおける最高スコアの項目との一致率は69%であった。単変量解析によるIPSSおよびVAS質問票の各7項目とIPSS-QOLとの相関関係の比較では、全項目でVAS質問票のほうが高い相関を認めた。VAS質問票7項目を用いたIPSS-QOLを予測する因子の多変量解析では、最も有力な予測因子が夜間頻尿のVASスコアであり、他に残尿感、頻尿と尿勢減弱も独立した予測因子であった。さらに、IPSSも含めた14項目でのIPSS-QOLを予測する因子の多変量解析では、夜間頻尿のVASスコアが最も有力な予測因子であり、他にも頻尿と残尿感のVASスコアが独立予測因子となった。残尿感および夜間頻尿のIPSSは、全体での解析においては前述のVAS項目に続く4、5位の独立予測因子であった。 α 1-blockerによる治療前後でのスコア変化についてIPSS-QOLの変化と各質問項目のスコア変化の相関を検討したが、これもIPSSと比較してVASの変化のほうが高い相関関係を認めた。

以上の結果より著者らは、VAS質問票が下部尿路症状を評価するうえでの良好な妥当性を有していることを示した。前立腺肥大症の治療の第一の目標は、最も患者が重いと感じている症状を改善させることであるが、今回の研究ではQOLに最も影響する症状の見極めも同時に重要であることが確認された。そしてそれらの症状の改善は、治療による患者自身の満足度の改善に直接影響すると考えられた。すなわち、最も重症な下部尿路症状とQOLに最も影響する下部尿路症状を同時に見極めるために、IPSS質問票とVAS質問票を併用することが推奨された。